



ベルクソンにおける有機体としての社会 : デュルケム社会学の受容をめぐって (特集2 国際シンポジウム報告 : ジルダ・サルモン氏を迎えて)

笠木, 丈

(Citation)

社会学雑誌, 40:183-198

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100486330>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486330>



ベルクソンにおける有機体としての社会

―― デュルケム社会学の受容をめぐつて ――

笠 木 丈

甲南大学文学部非常勤講師

一 はじめに

―― デュルケムの読者としてのベルクソン

アンリ・ベルクソンはその最後の名著『道德と宗教の二源泉』（以下、『二源泉』）において、それまで練りあげてきた「生の哲学」に依拠しながら社会についての考察へと着手した。よく知られているように、彼はこの著作において「閉じた社会」と「開かれた社会」という社会類型を提示している。すなわち、一方では、安定的であるが、ただ自己保存のみを目指す社会が「閉じた社会」と呼ばれる。他方では、「神秘家」と呼ばれる特権的な人格による創造行為によって、新たなものの湧出する開放的な社会が「開かれた社会」と呼ばれるのである。こうした社会の二分法にともない、道德と宗教もまた二種類に区別される。「閉

じた社会」には「閉じた道德」と「静的宗教」が密接に係し、それらは「閉じた社会」の紐帯を堅固にするための役割を担う。また、「開かれた社会」において見られるのは「開かれた道德」と「動的宗教」である。「開かれた社会」の開放性や創造性を体现するのは、神秘家が創り出すその種の道德・宗教に他ならない。

ベルクソンが『二源泉』において以上のような議論を展開するうえで、ひとつの主要な参照点としていたのが、エミール・デュルケムの社会学である。ベルクソンと同時代を生きたこの社会学者の名は、一見したところ、『二源泉』においてそれほど目立たなかったかたじけなく言及されない。しかし、『二源泉』のテキストに深く分け入っていくならば、デュルケムの議論が色濃くその影を落としている箇所を随所に見出すことができる。

ただし、ベルクソンのデュルケム読解は両義的である。ベルクソンはデュルケムからいくつかの論点を継承するとともに、同時にまたデュルケムへの根底的な批判を向けてもいる。ベルクソンによるデュルケムの批判を含めた受容について明らかにするために有効な観点として、本稿では『二源泉』において有機的な社会として捉えられた「閉じた社会」に着目する。有機的な社会としての「閉じた社会」の意義と限界を明確化することによって、われわれはデュルケムとベルクソンがいかなる点において重なりあい、また分岐するのかについて説明を行いたい。特に、両者の分岐点は、ベルクソン自身の議論の独自性に光を当てることになるだろう。ベルクソンとデュルケムという二人の思想家の関係を明確化させると同時に、それを通して、ベルクソンの観点が開く独自の地平を見定めることが本稿の目的である。

詳細な検討に入る前に、以下に行われる議論の概要について述べておこう。われわれはまず、ベルクソンにおける「閉じた社会」の果たす役割について焦点を当て（第二節）、そこにデュルケムの有機的連帯との共通性が見られることについて確認する（第三節）。続いて、「閉じた社会」には、デュルケムが有機的連帯に帰すことのなかった限界があり、その乗り越えの必要性があることを考察する（第四節）。こうした「閉じた社会」の乗り越え可能性は、ベル

クソンとデュルケムとの相違点そのものに着目することによって、明晰に理解することができる。そのため、デュルケムにおける社会の外在性について考察し（第五節）、そのうえで、ベルクソンにおける社会の内在性および生という観点からデュルケムとの対比を行う（第六節）。以上の考察によって、本稿ではデュルケムとベルクソンの共通点・相違点を明らかにするとともに、ベルクソンに固有の生という視座こそが、「閉じた社会」から「開かれた社会」への転換を可能にしていることを明らかにする。

二 ベルクソンにおける有機的社会とエゴイズムの乗り越え

まずは、ベルクソンによる「閉じた社会」とデュルケム社会学の共通点を検討しよう。そのためにわれわれが着目するのは、ベルクソンが「閉じた社会」に対して認めている一定の意義、すなわち社会統合を通じたエゴイズムの克服という側面である。

ベルクソンによれば、エゴイズムは人間の持つ知性の本性そのものに由来している。知性は「選択の能力」(DS& 11-26)であり、その限りで知性は人間に対して自由な行動の余地を与える。ベルクソンによれば、知性のこうした性格こそが人間に固有のエゴイズムを避けがたく生み出

すことになる。

バルクソンのこのような主張は、『二源泉』において見られる昆虫と人間の対比、とりわけ前者の持つ本能と後者の知性との対比に着目すれば理解しやすいだろう。バルクソンによれば、いかなるときも本能に従って振舞う昆虫において、エゴイズムはありえない。昆虫は、本能によってみずからの行為をくまなく規定されており、そこには自分の振る舞いに対する反省的意識の入り込む余地はまったくないからである。もし仮に、本能に従って他の蟻たちのためにひたすらに働く一匹の蟻が、あるときにふとわが身を顧みるならば、そこにエゴイズムが兆すこともあるだろう。だが、あくまでも本能的存在である昆虫にとつて、そのようなことは実際には起こりえない。知性を欠き、どこまでも本能に従う昆虫は、いささかの疑問をも持たずに、みずからが属する集団全体のために働き続けるのである。それに対して、人間の行動は昆虫とはまったく異なる。先述したように、知性を備える人間の行動には、一定の不確定性が認められるのであった。それは、みずからの行為についての意識的反省が可能であるということを意味する。昆虫の場合とは異なり、人間がときに利己主義的な行為へと走るのはそのためである。たとえば、ある人が何らかのやるべき行為について、「もううんざりだ」と感じるなら、その行為を投げ出してしまふこと、少なくともそう

考えることはできる。人間に固有のエゴイズムが芽生えるのはこのときである。人間に備わった知性が行為への反省を可能にし、それによってある程度の自由気ままな振る舞い、すなわち道徳的な義務からも自由な、エゴイスティックな振る舞いの余地を人間に与えるのである。『二源泉』における次の一節は、こうした観点から理解することができる。

社会で生きるすべての存在のなかで、人間は、社会の共通善が問題となる際に利己的な利害に屈して、社会の方針から逸脱することが可能な唯一の存在である。(DS216 = 二八一 cf. DS33 = 四九、94 = 一二六、222 = 二八九)

他の多くの生物種とは異なり知性を持つ存在であるがゆえに、人間は社会的・利他的行為から眼を背け、利己主義的な行為にふける唯一の存在だとされる。このように、『二源泉』によれば、知性的な存在である人間の本性そのもののうちに、エゴイズムは深く根を下ろしているのである。

だが、バルクソンはエゴイズムのこうした根深さを強調するのと同時に、それを乗り越える道筋をもまた明らかにしている。すなわち、「閉じた社会」への統合によるエゴイズムの乗り越えである。本稿で検討対象とする『二源

泉」の「閉じた社会」が問題となるのは、まずはこうした点においてである。「閉じた社会」は閉じた道德 (moral close) を通して「社会的压力」 (pression sociale) を諸個人に及ぼす。人びとはこの閉じた道德を身につけ、それに従って振舞うことで、逸脱的でエゴイスティックな行為に走ることなく、「閉じた社会」のうちに統合されるのである。

それでは、このときに作用している「社会的压力」とは、どのようなものだろうか。われわれは、この力が有機的なものであることに注意を向けておきたい。

ひとつの責務 (「閉じた道德」) が他のすべての責務に負っている力は、むしろ有機体の各細胞が、それを一要素とする有機体の奥底から取り入れる、不可欠で欠けるところなき生命の息吹に比せられる。社会はその構成員の各々に内在するものとしてさまざまな要求を持つが、大小を問わず、これらの要求の各々が社会の生命力の全体を表しているのだ。(DS3 = 一〇、強引用者)

このように、「閉じた社会」における道德が人びとをたがいに結びつけ、社会に統合する力は、有機体になぞらえて説明される。すなわち、「閉じた社会」では、諸細胞がたがいに結びつけられひとつの有機体を構成するのと同様

に、諸個人は結合しあい、社会を形成するのである。⁽³⁾ ことから見てとられるのは、ベルクソンが「社会的压力」を、有機体の「生命力」と同列に置いていることである。つまり、ベルクソンにとっては、「社会的压力」は本質的に生命的な次元に属するのである。

以上に見た『二源泉』での議論からは、「閉じた社会」の特徴として次の二点を取り出すことができるだろう。つまり、第一の点として、「閉じた社会」は社会統合によるエゴイズムの乗り越えを企図するということ、さらに第二の点として、「閉じた社会」への個人の統合には有機体とのアナロジーが見られるということ、を、『二源泉』において確認することができる。そして、まさにこの二点において、『二源泉』の「閉じた社会」論は、デュルケム社会学との明確な共通性を持つと言える。次節でこの点について考察しよう。

三 デュルケムにおける有機的連帯

デュルケム社会学と『二源泉』の「閉じた社会」論との共通点を明らかにするために、本節ではデュルケムの『社会分業論』を検討したい。周知のように、この著作では「機械的連帯」と「有機的連帯」という二種類の社会的連帯が対比的に論じられている。『二源泉』の「閉じた社会」論

との共通性が確認されるのは、こうした社会的連帯をめぐる議論においてである。以下、二種類の社会的連帯についてのデュルケムの所論を見ていきたい。

二種類の社会的連帯のうち、一方の「機械的連帯」は構成員の「類似」(DT74 = 一〇三)⁽⁴⁾によって特徴づけられる。デュルケムによれば、この種の連帯は、人びとがたがいに同じ「観念や傾向」(DT99 = 一二七)——デュルケムはこれを「集合意識」(DT46 = 八〇)とも称する——を共有することで形成される。この点に関してデュルケムが挙げるのは、「祖国」という観念である (cf. DT734 = 一〇三)。国民が自分自身の祖国を愛するとき、愛すべき祖国の観念を共有するという点において、国民はたがいに類似した存在となる。このような観念を共有し、人びとの類似性が強まればそれだけいっそう、人びとの社会的連帯は強化され、諸個人は社会のうちに強固に統合される。この種の連帯は同質性に依拠するものであり、この点において、たがいに類似した諸個人は、「無機物的物体」のなかでもつばら同質的運動だけを行う「諸分子」になぞらえられる (DT100 = 一二八)。以上に見た類似によって成立する連帯を、デュルケムが機械的連帯と呼ぶのはこのためである。

こうした機械的連帯は「未開」とされる社会においてより顕著に見られるが、歴史の進展とともに、徐々に影をひそめるようになる。とりわけ、近代の産業化が社会を複雑

化させていくにつれて、何らか特定の観念が社会の構成員全体に共有され、それが強固な社会的連帯を生み出すという事態は、ごく稀なものとなっていく。

こうした状況のなかでデュルケムは、もはや同質性には依拠しない社会的連帯を構想しようとする。それこそが、機械的連帯と対比させられる有機的連帯に他ならない。この種の新たな社会的連帯の姿を描き出すために、デュルケムが注目するのは分業という現象である。分業、すなわち労働の専門化・細分化の進展にともない、人びとの社会生活はきわめて多様なものとなっていく。だが、デュルケムによれば、こうした事態は必ずしも社会的連帯にとつての脅威とはならない。社会生活の多様化はむしろ、新たな連帯の条件となるとデュルケムは言うのである⁽⁵⁾。というのも、分業によって個々人の生活が多様に専門化していくならば、それにともない、人びとはたがいに依存を強めていくことになるからである。このように、多様化によって生み出される相互依存こそが、近代社会に適合的な社会的連帯として位置づけられるのである⁽⁶⁾。

このように特徴づけられる有機的連帯は、その名が示すように、有機体とのアナロジーにおいて理解されていることにわれわれは注意を向けおきたい。高等動物の各器官 (cf. DT101 = 一二九) にとりわけ顕著に見られるように、有機体の器官はそれぞれの機能に応じて多様に分化すると

ともに、相互に依存しあっている。そして、分化にともなつて生じたこの相互依存こそが有機体に「統一性」(ibid.)を与えるのである。ここに見られるのは、分業に基礎を置くタイプの連帯と同様の構造であり、それゆえ、この種の連帯をデュルケムは有機的連帯と呼ぶのである。

このように、デュルケムにおける社会的連帯と分業をめぐる議論でも、有機体とのアナロジーが見られるという点では、『二源泉』の「閉じた社会」との共通性がすでに垣間見られる。この点をさらに深めて考察するために、デュルケムの有機的連帯と道德との関係に着目したい。

デュルケムにおける分業論の射程は単に経済的な次元にとどまるものではなく、分業は道德的含意を持つという点は見逃されてはならない。上述したように、近代社会における分業は、人びとの相互依存を帰結する。こうした相互依存のうちに、デュルケムはもはや同質性を頼みにはできない近代社会における、新たな道德の萌芽を見てとる。

われわれを補完する者のイメージは、われわれ自身のうちにおいて、自分に対するイメージと不可分のものになる。というのは、前者は後者の自然な補足物だからである。したがって、前者「われわれを補完する者」のイメージは、われわれの意識の不可欠の構成部分であり恒久的な部分となっているから、われわれは

それなしに過ぐすことがもはやできないのであり、その力を増大させるものごとく求めようとする。ここに、われわれを補う者のイメージを具現する人々からなる社会を、われわれが愛する理由がある。(DTS
Ⅱ 六三)

分業による相互依存が深まった社会において、われわれは「われわれを補完する者」と、ただ経済的な利害関係だけで結びついているわけではない。それどころか、自分についてのイメージでさえ、みずからを「補完する者」と切り離して思い描くことはできない。われわれ自身が「それなしには過ぐすこと」ができず、「その力を増大させるもの」を求めようとするような存在として、われわれを「補完する」他者たちは立ち現れるのである。このように、分業による連帯は、自己自身のイメージや価値判断にまで深く根を下ろしているとデュルケムは言う。

このとき、分業による相互依存は、道德の基礎としての役割を果たしていると言える。もはや同質性を頼りにはできない近代社会において道德の基礎をなすのが、分業による相互依存である。分業を通してたがいがたがいに補完しあう関係が結ばれるがゆえに、同質性を失った社会においてもなお、利他的・道德的な価値が成立可能なのである。ここに見られるような道德的側面は、有機的連帯にとつ

て本質的な重要性を持つ。なぜなら、有機的連帯による個人の社会的統合において、エゴイズムの乗り越えという課題を避けることはできないからである。

連帯の源泉であるものすべて、人間をして他者を尊重すべきことを強制するものすべて、自らの運動を自己のエゴイスティックな衝動とは別のものにもとづいて律すべしと要請するものすべて、これらはどれもが道德的なものである。そして、これらの紐帯がその数を増すにつれて、この道德性はますます堅固なものとなる。(DT394 = 三八一—cf. DT396 = 三八四)

ここでは、社会的連帯がエゴイズムの乗り越えと明確に関連づけられている。そして、その限りにおいて、社会的連帯は道德的なものでなければならぬ。もし仮に、社会的連帯が道德的意識にとつて外的なものでしかなければ、エゴイズムの問題に手をつけることは不可能であり、それゆえ社会統合の処方箋としても不十分なものにすぎなかったらう。⁽⁸⁾

以上の考察を経て、デュルケムの有機的連帯とベルクソンの「閉じた社会」との共通性は明らかに思ったように思われる。ベルクソン同様、デュルケムもまた社会を有機体とのアナロジーで捉えたうえで、そうした社会への道德を

通した統合によつてエゴイズムを乗り越えるという議論を展開したのである。⁽⁹⁾

ただし、両者の議論には無視しえない相違点が存在することもまた確かである。そのことは、これまでの議論のなかですでに垣間見えてもいる。二節で見たように、ベルクソンは有機体とのアナロジーによつて社会を語る際に、閉じた道德の「社会的圧力」を有機的なものと捉え、「生命の息吹(souffle de vie)」や「生命力(vitalité)」という語によつてこの力を表現していた(DS3 = 一〇)。道德の力をこのように生命的次元で捉えることは、デュルケム社会学の側からすれば決して容認しえない立場と映るだらう。われわれが後で検討するように、両者のこうした相違点は各々の方法的な立場の相違に由来すると考えられる。

だが、この点について考察を深めるのに先立つて、まずは別の観点から両者の相違点について検討することにした。すなわち、社会統合における個人の位置づけという点である。この点を検討することによって、両者の相違とあわせて、ベルクソンの「閉じた社会」が抱えている問題点について明らかにしたい。

四 ベルクソンにおける有機的社会的問題点

ベルクソンにおける「閉じた社会」との対比を行うため

に、引き続きデュルケムの『社会分業論』について、今度は有機的連帯における個人の位置づけを見ていきたい。この点に関して、次の一節を取りあげよう。

〔有機的〕連帯は、高等動物に観察される連帯と似ている。そこでは確かに、各器官には、その専門的な特徴やその自律性があるけれども、有機体としての統一性は、この諸部分の個性化 (individuation) が著しくなるほど、いっそう大きくなる。(DT101 = 119)

ここから読み取られるのは、有機的連帯において、それを構成する諸部分、つまり諸個人には、それぞれの自律性が認められているという点である。同質性に依拠する機械的連帯とは異なり、各部分の多様化から帰結する有機的連帯においては、「諸個人に固有の活動領域」(ibid.) が保証されている。というのも、「個人的人格は専門化の進展によって損なわれるどころか、分業とともに発達する」(DT399 = 286)と言われるように、有機的連帯の基盤である分業は、個性化を促進するからである。しかも、先に引用したように (DT101 = 119)、そうした諸個人がそれぞれに個性化されるほど、全体としての「統一性」も「いっそう大きくなる」とデュルケムは言うのである。

このように、有機的連帯においては、分業によって各人

の個性化が促進されると同時に、そうした個性化はさらに連帯そのものの強度を高めていく。こうしたデュルケムの議論によれば、有機的連帯のなかで個人はいささかも軽んじられてはいない。個人は有機的連帯のなかでみずからの場所を持ち、しかも連帯を強化する契機として重視されていると言える。

それでは、ベルクソンの場合はどうだろうか。『二源泉』の「閉じた社会」に眼を転じるならば、事態はまったく別の様相を呈している。個人は「閉じた社会」のうちに有機的に統合されるにあたって、その独自性を決定的に喪失するのである。ベルクソンの「閉じた社会」における、こうしたネガティブな側面について、ヒエラルキーと犠牲という二つの観点から続けて見ていきたい。

一点目のヒエラルキーについては、次の引用を参照しよう。

個体的な有機体が、社会の構図をあらかじめ告知するような構図 (un plan qui annonce celui des sociétés) にもとづいて形成されるのは、生命が、分業する諸要素間の連携であり、ヒエラルキーであるからだ。(DS123 = 1611)

ここに見られるのは、まずはデュルケムと共有される分

業という観点である。ベルクソンにおいても、デュルケム同様、有機的に結びつけられた社会の構成員のあいだでは分業による連携が行われている。ただし、それに加えて、ここではデュルケムが触れることがなかったヒエラルキーという否定的要素が、分業を行う諸個人のあいだに見出されていることには留意されるべきである⁽¹⁰⁾。

ここでベルクソンは、有機体とのアナロジーにおいてデュルケムが取りあげなかった側面に眼を向けていると言える。実際の有機体において諸部分が多様に分化しているのはすでに触れたとおりであるが、それらは必ずしもフラットな関係にはない。脳や神経系などのより中枢的な部分と、より周縁的な部分とのあいだにはヒエラルキーが存在している。ベルクソンは、社会が有機的に組織される際には、実際の有機体同様、ヒエラルキーは不可避だと考えた。それゆえ、諸個人がヒエラルキーに組み込まれるという側面は、ベルクソンの有機体アナロジーにおいて無視しない一角を占めることになる。

このように、構成員のヒエラルキーをとまう限り、ベルクソンにおける有機体としての社会では、デュルケムの場合とは異なり、諸個人は等しく尊重されているとはいえない。「閉じた社会」においてヒエラルキーに組み込まれることで、多くの人びとは支配や従属を余儀なくされるからである。

さらに第二の点として、「閉じた社会」と犠牲をめぐる問題について考察したい。「閉じた社会」は個人の犠牲を顧みないという側面を持つ。というのも、「閉じた社会」は、何よりもみずからの維持・存続を優先する傾向があるからである。そのため、「閉じた社会」は「閉じた道徳」を通して諸個人に働きかけ、ときには自分自身を犠牲にしても「閉じた社会」の維持に努めるよう求める。要するに、「閉じた社会」においては、「全体の最大利益のための〔……〕部分の犠牲」(DS2 = 八 cf. DS13 = 一六二)が求められることは少なくないのである。

「閉じた社会」へと供せられるこうした個人の犠牲について説明するために、ベルクソンは「個人的利益」と「社会的利益」に着目する。ベルクソンによれば、「閉じた社会」においては、「個体的なもの(individuel)と社会的なもの」が混ざりあう寸前の状態にある⁽¹¹⁾(DS33 = 四九)。実際の有機体においても、たとえば細胞のような構成要素は全体としての有機体の維持のために、みずからを犠牲にすることをいとわない。このとき、有機体の部分と全体の利益がほとんど混然一体となつていえると言えらる⁽¹²⁾。まさにこうしたことが、「閉じた社会」においても生じているとベルクソンは言うのである。個人の利益と社会全体の利益の境界が不明瞭ななか、個人は「自分自身のため」(ibid.)という意識のもとであくまで自発的に、みずからを社会の

ために犠牲に供する。このように、「閉じた社会」は往々にして個人を顧みず、社会全体の維持のための犠牲を個人に求めるのである。

以上に見たように、個人をヒエラルキーに組み込み、ときには犠牲にさえ供する「閉じた社会」は、その構成員を等閑視する社会である。この点が、ベルクソンの「閉じた社会」とデュルケムの有機的連帯をはっきりと分かつ点であり、また「閉じた社会」が持つ限界に他ならない。「閉じた社会」は一方では社会統合によるエゴイズムの乗り越えを可能にするが、他方では個人を抑圧する社会であることもまた確かなのだ。だが、こうした「閉じた社会」は『源泉』の最終的なヴィジョンではない。ベルクソンは「閉じた社会」とは異なった社会のあり方を「開かれた社会」という概念によって提示しているのである。この点について明らかにするために、続いて、デュルケムとベルクソンのもうひとつの相違点——すなわち、個人に対する社会の外在性／内在性をめぐる相違——から考察することにした。

五 デュルケムにおける社会の外在性

本節では、まずはデュルケムにおいて見られる、個人に対する社会の外在性について見ていきたい。こうした観点

がはつきりと打ち出される著作は、デュルケム社会学の方法論的なマニフェストでもある『社会学的方法の基準』である。

デュルケムがこの著作において、社会的事実の概念を社会学の礎として確立したこと、また、この社会的事実が個人に対して外在的だと述べていることは、よく知られているだろう (cf. RMI4 = 六四)。社会学のアイデンティティにも深く関わる社会的事実のこうした外在性は、まさにデュルケムをベルクソンから分かつ点に他ならない。以下では『社会学的方法の基準』を取りあげ、社会学的事実の外在性が、社会学者デュルケムにとって不可欠の重要性を担っていることを見ていきたい。

『社会学的方法の基準』によれば、社会的事実とは社会における個人の振る舞いを規定する力、すなわち「拘束的な力 (puissance contraignante)」(RMI01 = 一八〇) を持つ。こうした力は、社会的事実が個人に対して外在的であることに由来しているとデュルケムは言う。社会的事実が個人の外に存在し、個人を超えた存在であるからこそ、個人の行動を拘束し、方向づけることができるのだ。

個人に対する社会的事実のこうした外在性を説明する際に、デュルケムが依拠するのは「一種独特の総合」(RMI XVI = 三三) という概念である。デュルケムはこうした「総合」によって、位相の異なるさまざまな現象のあいだに還

元不可能な非連続性が生じると考えている。たとえば、細胞の生命現象は、それを構成する分子の物理的な運動に還元することはできない。デュルケムがここに想定するのは、次のような論理である。「全体とは部分の総和と同じものではないからだ。全体とは、これとは別の何ものかであり、その属性は全体を構成する諸部分が示す属性とは異なる」(RM102 = 一八一)。つまり、諸部分がひとつの全体を構成するときには、そこには「一種独特の総合」が生じるのであり、この「総合」によって、部分へと還元しえない全体という次元が成立するのである。

これは個人と社会の関係についても同様である。個人という諸部分によって構成される社会とは「一種独特の総合」なのであり、個々人の単なる寄せ集めには還元不可能な固有の次元を持つ。そのため、個人と社会のあいだには明確な断絶が存在し、社会や社会的事実とは、個人を超えて、個人の外部に存在することになる。

デュルケムによれば、このように個人を超えて存在する社会的事実こそが社会学に固有の対象に他ならない。この意味において、個人に対する社会的事実の外在性は、デュルケムにとって社会学を独立したひとつの学問たらしめる基礎となっている。もし仮に、社会的事実が独自の次元に位置づけられるのではなく、個人的なものに還元可能であるとするならば、社会学は固有の対象を失うことになるか

らである。社会的事実が「個人的存在の延長 (prolongement de l'être individuel)」(RM101 = 一八〇)ではないから、社会学には心理学や生物学 (cf. RM3 = 五〇) のような個人・個体を取りあげれば事足りるような諸分野には還元しえない、固有の領域が割り当てられるのだ。「社会学は他のいかなる科学の付属物」(RM143 = 二三六) でもなく、確固とした学制的自律性を持つのはそれゆえである。

以上のように、社会的事実社会学の自律性にとって不可欠な基礎をなしているが、そのことを可能にする背景として、個人に対する社会の外在性があることを確認してきたい。

六 有機体としての社会を超えて

——ベルクソンにおける生とその二重性

前節において見た個人に対する社会の外在性は、まさにベルクソンがデュルケムに対して異論を唱える点である。『二源泉』に即しながら、デュルケムへの批判を見ていこう。

何が誤りかという点、道德的な圧力と熱望 (閉じた道德と開かれた道德) がその決定的説明を、単なるひとつの事実 (un simple fait) とみなされた社会的生のなかに見出すと思ひ込むことだろう。社会という

ものが実在し、したがって社会はその成員たちを必然的に拘束し (exerce nécessairement sur ses membres une contrainte)、この拘束が責務であるとよく言われる。しかし何よりもまず、社会が実在するためには、個人が一連の生来的素質の総体をそっくりもたらしでなければならぬ。だから、社会そのものは説明されていぬ。結局、社会の獲得物の下を探索し、生に到達しなければならぬのだ。人間社会は、加えて人間種も同様、この生の顕現にすぎない。(DS1023 = 一三七 強調引用者)

ここではその名こそ明示されないが、デュルケムのごが念頭に置かれているように思われる。「ひとつの事実」としての「社会的生」、社会の成員に必然的に行使される「拘束」などは、デュルケム社会学の用語・枠組みそのものである。ただし、ここでのデュルケムの評価はきわめて否定的である。というのも、デュルケムの立場では、「社会そのものは説明されていない」からである。ベルクソンは、社会的なものを「単なるひとつの事実」とみなし、また社会的事実の持つ拘束的な力の源泉を、それ以上にさかのぼって問い尋ねようとしぬデュルケムに対して不徹底を感じているのだ。実際、社会的事実が還元不可能な固有の次元に位置づけられていたことを、われわれは前節で確

認した。ベルクソンが批判するのはこうした社会という次元の自律性あるいは自閉性に他ならぬ。

それに対して、ベルクソンはさらに先に進み、「生に到達しなければならぬ」と述べている。つまり、社会とは「生の顕現」であるのだから、それを所与とするのではなく、生そのものにさかのぼって捉えなおす必要があるというのである。かくして、ベルクソンはデュルケムの社会概念を「閉じた社会」として取りあげなおす。この「閉じた社会」は、デュルケムの社会概念からいくつかの重要な側面を継承する一方で、生というベルクソンの観点から捉えられたものであり、それゆえ、デュルケムとの相違もまた無視しえない。実際、すでに述べたように、ベルクソンは「生命の息吹 (souffle de vie)」や「生命力 (vitalité)」といった生命に関わる語によって「社会的圧力」を表現していた (DS3 = 10)。このことは、「閉じた社会」やその圧力が、われわれ自身の生そのものから力を得ているということをも物語っている。

このように、生という次元から社会を捉えなおすことは、デュルケムとの対比にあたって決定的な帰結をもたらす。すなわち、ベルクソンは「社会はその構成員のおのおのに内在する」(DS3 = 10 cf. DS108 = 一四三、110 = 一四六) と言うのである。前節で見たように社会と個人の断絶を強調するデュルケムとは反対に、ベルクソンは個人

への社会の内在を説く。社会が生の顕現である限り、社会とわれわれ一人ひとりの生とは、デュルケムの言うように、別々の次元に置かれるわけではないのだ。こうした社会の内在性は、デュルケムとの決定的な相違点である。しかし、事はそれに尽きない。社会の内在性は「閉じた社会」の限界を乗り越えるための可能性を開くのである。この点に關して、ベルクソンは次のように述べる。先ほど引用したデュルケム批判に続く箇所である。

けれども、こう言っただけでは十分ではない。単にいかにして社会が諸個人を拘束するかではもはやなく、いかにして個人は社会を裁き、社会を道徳的にすることができのかを知りたいと欲するなら、さらに深く掘り進まなくてはならない。社会が自足しているなら、それは最高の権威である。だが、社会は生の諸規定のひとつでしかないなら、人間種を生命進化のある点に位置づけざるを得なかった生は特権的な個体へと新たな種の推進力を伝え、これらの個体は社会がより遠くへ進むのを支援するために生のうちにふたたび浸かるのだということがわかるだろう。確かに、生の原理そのものに行かねばならなかっただろう。

(DS103 = 一三七・八)

ベルクソンは、生という観点に立つことで、デュルケムの社会概念を「閉じた社会」として再定義するだけではない。生という視座から同時に目指されているのは、かくして再定義された「閉じた社会」そのものの乗り越えでもある。「閉じた社会」は個人を統合し、そのエゴイズムを矯める一方で、四節で見たように、統合された個人に対してきわめて無慈悲な性格をも示すのだった。そうした類の社会を、「自足」した「最高の権威」とみなすことなく、個人が「社会を裁き、社会を道徳的にする」という可能性を見出すためにも、ベルクソンは生という次元に定位するのである。ここには、「閉じた社会」とは別の、もうひとつの社会のあり方、すなわち「開かれた社会」へと至る道筋が示唆されている。だが、それはいかにして可能だろうか。以上の箇所では、この点についてはっきりとしたことは語られていない。

とはいえ、先に述べたような個人への社会の内在性が鍵を握ることは、いずれにせよ確かである。このことを示すために、われわれは生の持つ二重性について着目したい。こうした二重性は『二源泉』に先立つ著作、『創造的進化』からすでに見られるものである。ベルクソンは『二源泉』において、生の二重性をあらためて取りあげなす。その際、ベルクソンが用いるのはスピノザの用語である。すなわち、「所産的自然 (Nature naturee)」および「能産的自然

「Nature naturante」という語によって——ただし、「スピノザの表現の意味を少々変えて」——ベルクソンは生の二重性を表現する(DS56=七七・七八)。これらの言葉に沿って生の二重性について見ていこう。

まず、所産的自然とは、生物の種が持つている自己保存へと向かう本性のことである。「閉じた社会」やその圧力にもこうした本性が刻まれており、それゆえ「閉じた社会」はみずからを保存する傾向を持ち、諸個人がその利害に沿って振舞うように圧力を及ぼす。もう一方の能産的自然とは、エラン・ヴィタル、すなわち生命進化を駆動し、さまざまな種を生み出し続ける自然の創造的な力に対応している。これらの生の二つの側面は別々のものではない。所産的自然の保守的傾向と能産的自然の創造性とは、いずれも同じ生の二つの連続的な層をなしている。したがって、所産的自然の奥底に創造的な能産的自然を見出し、それによって所産的自然の自己保存的傾向を乗り越えることが可能なのである。

ベルクソンによれば、それは決して容易いことではない。「閉じた社会」を乗り越え、能産的自然の創造性に触れることができるのは、ベルクソンが「神秘家」と呼ぶような、ごく限られた例外的存在にすぎない。われわれの通常の社会生活の大部分は、所産的自然に支配され、閉じた性格を色濃く帯びている。しかし、どれほどの隘路であっても、

所産的自然から能産的自然への道、すなわち「閉じた社会」から「開かれた社会」への道それ自体は決して不可能ではないのだ。もし、われわれが通常生きている社会がわれわれの外部にあり、それ自体で完結したものであれば、こうした展望が開かれることはなかっただろう。しかし、生の顕現としての社会がわれわれに内在するのであれば、その内奥において所産的自然を突破し、能産的自然へと至る道筋は確保される。生という位相から社会を捉えるというベルクソンの視座に賭けられていたもの——それは、デュルクムの社会を「閉じた社会」として捉えなおすとともに、そうした有機体としての社会それ自体を超えて、「開かれた社会」のほうへと進みゆくことだったのである。

注

- (1) 本稿では煩雑を避けるため、Bergson ([1932] 2008 = 二〇一五) については、該当ページ数を示すにあたって、Dsの略号を用いる。
- (2) 「一匹の蟻のことを考えてみよう。反省的思考の閃きがこの蟻をよぎり、そのとき蟻は、他の蟻たちのために休みなく働くのはまったく間違っていると判断するだろう」(DS19 = 三二)。
- (3) 「ある国 (la cité) の構成員は一個の有機体の諸細胞のように支えあう」(DS6 = 一四)。
- (4) Durkheim ([1893] 2007 = 一九七一) については、該当ページ数

を示すにあたって、DTの略号を用いる。

- (5) 「前に述べた〔機械的〕連帯が、個人の類似に由来するのに対して、この〔有機的〕連帯は、諸個人がたがいに異なることを前提とする」(DT100-1 = 一二八)。

- (6) デュルケムは、機械的連帯から有機的連帯への漸進的な移行を「歴史の二法則」(DT149 = 一七二)と捉えている。

- (7) 以下の箇所に見られるように、デュルケムが分業と道徳的価値を結びつけていることは明らかである。「分業によってこそ、個人は社会に対する自己の依存状態を再び意識し、分業からこそ個人を抑制し服従させる力が生じる〔……〕要するに、分業が社会的連帯の卓越した源泉になるから、それと同時に、分業は道徳的秩序の根底ともなるのである」(DT396 = 三八四)。

- (8) 社会的連帯とエゴイズムというデュルケム社会学にとって重要な二つの論点を関連づけるにあたって、「自殺論」での議論についても触れておきたい。

エゴイズムの問題については、この著作においても取りあげられている。ただし、『社会分業論』では単にエゴイズムと呼ばれ一括りにされていた概念は、デュルケムの思想の深化にともない、『自殺論』では新たに導入されたアノミー概念とエゴイズムとに分節されることになる。アノミーとは社会的な無規制に由来するものであるのに対して、エゴイズムは社会統合の脆弱化によるものとされる。

しかし、両者はいずれも、「同じ社会状態の異なった状態にすぎない」(Durkheim, [1897] 2004: 325 = 一九八五・三六二)、あるいは「社会の解体状態」(Durkheim, [1897] 2004: 440 = 一九八五・四九一)に由来するとされている点では変わらない。し

たがって、アノミーおよびエゴイズムという異なる概念に分節されているが、『自殺論』においても『社会分業論』と同様、個人主義的な逸脱に抗していかにして社会を統合するかという問題設定そのものは、維持されていると言えるだろう。

- (9) デュルケムの有機的連帯とバルクソンの「閉じた社会」の共通性については、両者が「中間集団」と関連しているという点からも確認することができる。

デュルケムが『自殺論』および『社会分業論』の第二版序文(一九〇二年)において、「中間集団」の役割を重視していることはよく知られているだろう。『自殺論』では「職業集団あるいは同業組合」(Durkheim, [1897] 2004: 415 = 一九八五・四八五)は、過度な個人主義を抑止するための効果的な対策として挙げられていた。また『社会分業論』第二版序文では、個人と国家に存在する大きな隔たりを埋めるために、中間集団の役割が強調されていた(DT XXXII-XXXIII = 二四・五)。

われわれは「二源泉」の「閉じた社会」論においてもまた、こうした中間集団の役割に眼が向けられていることを指摘しておきたい。「われわれと社会のあいだに仲介者を挟み込むことで、社会は事態を著しく容易にした。われわれは家族を持ち、ある仕事や職業をなしている。われわれは町や区や県に属している。こうした集団が社会のなかにびつたりはまっているところでは、その集団に対するわれわれの責務を果たせば、それ以上のことをしなくても、社会に対する責務を果たしたことになる」(DS12 = 二一・二)。ここで語られているような中間集団の役割、すなわち個人とより大きなスケールの社会との懸隔を埋める仲介者となる役割、また、社会的な責務(閉じた道徳)の遂

- 行を容易にし、それによって社会に個人を組み込むという役割は、デュルケムの挙げるものときわめて近いものと言えるだろう。
- (10) ベルクソンが、有機体としての社会とヒエラルキーを結びつけているという点については、次の箇所も参照。「社会について哲学しようとして、われわれはそれをひとつの有機体に喩えるだろう。その諸細胞は不可視の紐帯によって結ばれ、巧妙なヒエラルキーのなかでたがいに従属しあっている」(DS1n=18)。また別の箇所では、有機体としての「閉じた社会」は「権威、ヒエラルキー、固定」(DS301=三八九)という特徴があると指摘されている。
- (11) この点については、「二源泉」の次の箇所でも論じられている。「細胞は自分自身のために生きるが、同様に自分が属する有機体のためにも生きており、有機体に生命力をもたらすとともに、反対に有機体から自分の生命力を借り受けてもいる。必要ならば、細胞は全体のために自己を犠牲にする。おそらくそのとき、もし細胞が意識を持っていたならば、自己を犠牲にしたのは自分のためだと思うだろう」(DS33=四九)。
- (12) Durkheim ([1895] 1977=二〇一八) については、該当ページ数を示すにあたって、RMの略号を用いる。
- (13) デュルケムが有機体とのアナロジーを用いて有機的連帯を語ったことは、このように社会学を生物学と明確に区別したことで矛盾するように見えるかもしれない。しかし、そこには矛盾はないとプルヴィエは述べている。というのも、有機的連帯における有機体とのアナロジーは、あくまで社会の直接的な観察に依拠した主張であるが、そうした観察そのものはあくまで社会

学の範疇に属するからである。デュルケムの基準に照らしても、生物学的なアナロジーが社会的な観察に先立つのではない、あくまで観察の後に来るアポストリオリなものであれば、不当な使用にはならないとプルヴィエは整理している (Keck & Plouviez, 2008: 58)。

文献

- Bergson, Henri, [1932] 2008, *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF. (= 合田正人・小野浩太郎訳、二〇一五『道徳と宗教の二源泉』筑摩書房。)
- Durkheim, Emile, [1893] 2007, *De la division du travail social*, PUF. (= 田原音和訳、一九七一『社会分業論』青木書店。)
- , [1895] 1977, *Les règles de la méthode sociologique*, PUF. (= 菊谷和宏訳、二〇一八『社会学的方法の基準』講談社。)
- , [1897] 2004, *Le suicide : étude de sociologie*, PUF. (= 宮島喬訳、一九八五『自殺論』中央公論社。)
- Keck, Frédéric & Mélanie Plouviez, 2008, *Le vocabulaire de Durkheim*, Ellipses.